

長野県岡谷東高等学校における NIE

指定校 1 年次 長野県岡谷東高等学校 山野井 亮秀

【1】本校の取り組み

全日制普通科である本校は全校生徒約 450 名、各学年 4 クラスである。近年、岡谷東高校の校風は大きな転換期を迎えており、授業は落ち着いた雰囲気で行われ、規範意識も向上傾向にある。本校は、2008 年度からコース制を導入し、生徒達は 2 年生から健康スポーツコースと教養フロンティアコースに分かれて学習する。健康スポーツコースは、「体育理論」「スポーツ栄養」「基礎福祉」などの授業を履修するなど、豊富な体育実技、福祉科目実習を学ぶことができ、運動部の中心選手として活躍する生徒が多い。教養フロンティアコースは 2 年次から人間系(文系)と自然系(理系)に分かれ、希望により「英語研究」「探求数学」「発達と保育」「基礎福祉」「フードデザイン」などを履修する。松本大学人間健康学部や信州豊南短期大学との連携教育も活発に行われており、生徒の進路意識を高める取り組みが行われている。進路先としては、医療・看護・福祉・保育分野への進学や、製造・福祉・サービス分野への就職が多い。

生徒達への新聞に関するアンケートによると、新聞を購読していない家庭が約一割で、長期休暇の課題として新聞を扱うことには、二の足を踏んでしまうのが現状だった。そのため NIE 推進協議会から 4 ヶ月の新聞購読をいただけることは、誠に有り難いことであった。また本校生徒も他校の例に漏れず、「テレビ欄やスポーツ欄を見るのみ」という生徒が多く、「興味がない」「分かりにくい」「読めない漢字が多くある」などを理由に新聞を敬遠する生徒が多数である。しかし本校生徒は、興味のあることには素直に反応を示す傾向があり、入口のハードルさえクリアしてしまえば NIE 推進はさほど困難ではないという、個人的印象があった。そのため、単に新聞記事を配布するだけではなく、一捻り加えることを常に意識した。また、進路選択を意識させるために、医療・看護・福祉・保育・製造などの分野に関する記事を積極的に配布した。

購読する新聞は、特別教室の設置コーナーに置かれ、生徒が自由に閲覧できる環境を整えた。NIE の実践は、主に地歴公民科と国語科が担当した。本校では「時事問題」「現代社会」等の科目で、授業における新聞活用が継続的に行われてきたが、学校全体での取り組みは初めてのことであった。そのため NIE 研究指定校に認定されたことをきっかけに、より活発な実践を目指した。具体的な実践例を以下に挙げる。

- ・信濃毎日新聞「斜面」、信濃毎日新聞夕刊「今日の視点」、産経新聞「産経抄」等の書き写し

現代社会・地理 A・国語表現の授業や LHR、総合の時間で取り組んだ。時事問題や沖縄関連の書き写しを中心となった。実施する度に生徒達は「うわ～」と嫌そうな顔をするが、すぐに一心不乱に書き始めていた。

- ・スクラップブックを利用した記事収集(長期休業課題や通常授業内で実施)

通常授業で実施する際は、記事を 2 つ切り抜き、感想か要約文を書く。回数を重ねるごとに、記事を選択する際に新聞を精読する生徒が多くなり、「家で新聞を読むようになった」と語る生徒も多数。

- ・記事要約

新聞記事の文章はもともと簡潔に書かれているので、ある程度長文の記事を利用した。興味深いコラムが満載である信濃毎日新聞夕刊の記事を採用することが多かった。生徒からは「入試で役立った」と好評であった。

- ・見出し考察

新聞記事を読み、その内容から見出しを考察する課題である。本校生徒達にとって、最も難易度が高

かったと思われるのが、この見出し考察であった。見出しを「〇〇〇〇〇〇〇〇」などと文字数だけ分かるようにしておいたのだが、途中で諦める生徒多数。次年度は提示する記事内容を再考したい。

- ・記事の比較による各紙論調の特徴考察(後述)
- ・新聞記事を参照に問題を作成する「テスト作成テスト」(後述)
- ・地歴公民科・英語科のコラボレーション授業「日本と海外の新聞における論調の相違点」

日本とアメリカの「安倍首相」に関する新聞を配布し、アメリカの新聞が持つ強い批評性に気付かせた。さらに「新聞誕生の起源」「文化の影響」について説明した後、「なぜ米新聞は強い批評性を持つのか」について意見交換を交わした。

- ・地歴公民科のNIE 公開授業「高校生記者が見たアメリカ」(後述)

【2】実践のねらいと詳細

(1)NIE 実践の導入

前述したように、素直な生徒が多い本校生徒にも新聞に対する抵抗感は少なくなかった。そのため、「テスト作成テスト」で、そのハードルを下げることを図った。これは、高校生新聞や毎日新聞「質問なるほど」などの分かりやすい解説が掲載された記事を参考に、問題を数問作るという課題である。問題作成完成後に回収して、ランダムに再配布し、生徒は受け取ったプリントに書かれている問題を解く。全問解けたら問題作成者に返却し、採点してもらう。まずは平易な文章の新聞から読み始めることで、新聞への抵抗感を無くすねらいがあった。その他にも、普段話さないクラスメイトとのコミュニケーション、問題作成者の立場を経験することによる日本語への意識など、様々な効果が実感できた。一度自分の席から離れるという動作による眠気覚ましという重要な作用も期待通りあった。

(2)通常授業での実践

本校 NIE 実践の中心となった授業は現代社会(3年全クラス)である。この授業では、生徒達が、社会的問題に対する「主体的視線」と「多角的視野」の重要性を意識できるような実践を目指した。そのため、時事的な事柄を扱うこと、論調の異なる複数の新聞記事を比較することに重点を置いた。また諏訪地域の現状を理解し、「地域の未来」のために求められる産業・人材・町づくりを考察するべく、地域関連の新聞記事を提示する機会を増やした。

①「主体的視線」に関する実践例

社会的な問題に対する「主体的視線」を育成するため、気仙沼市の防潮堤建設問題を取り上げた。授業担当者は、8月に東日本大震災被災地の現状視察研修会に参加し、防潮堤建設の是非を巡る宮城県と住民達の紛擾を知った。そこで研修会後の授業において、生徒達は新聞から防潮堤建設のメリットとデメリットを比較し、地域住民達の切実な要望を知り、国・宮城県・気仙沼市の行政の焦りを学んだ。そして「防潮堤建設の賛否」をテーマとして、気仙沼市民の立場からディスカッションを行った。建設賛成派は防潮堤建設のメリットを主張しながらも遺族の心情に悩み、建設反対派は防潮堤建設のデメリットを訴えつつも復興が進まない現状にジレンマを感じていた。お互いの立場から出てくる異なる主張に耳を傾ける中で、彼らは必然的に自分の地域の防災情報を意識するようになっていった。「主体的視線」の成熟を図りながらも、「多角的視野」を意識させることにも成果があった。

②「多角的視野」に関する実践例

「多角的視野」を意識させるため、安倍首相の靖国神社参拝問題を取り上げた。生徒達は数多くの新聞記事から、安倍首相・英霊の遺族・ネトウヨ・日本の世論・日本のメディア・韓国・アメリカなど、それぞれの立場から、様々な角度からこの問題を見た。そして、一方向からものごとを考察することの危険性を考えた。特に、首相の靖国参拝に関する朝日新聞と産経新聞の記事を比較した授業では、

同一内容の事象を扱っているにも関わらず、大きく論調が異なっている事実を知り、複数の新聞を併読することの重要性を学んだ。現代社会では同様の方法で、竹島問題や尖閣諸島問題も取り上げた。

「多角的視野」をもってものごとを考察するためには、「主体的視線」を持つことが不可欠であり、①と②は常に連動しながらの授業となった。

③「地域の現状理解と将来考察」に関する実践例

岡谷東高校が掲げる目標の一つである「地域を支える人間の育成」を念頭に置き、靖国神社と諏訪大社の比較、富士見町のメガソーラー、鹿の食害、諏訪地域の最先端医療機器の製造、岡谷市の野菜工場などの新聞記事から、将来の諏訪地域を考え、進路選択の幅を広げた。

(2)NIE 公開授業

これら①～③の総括的授業となったのが、NIE 公開授業「高校生記者が見たアメリカ」である。本校3年のK君は、夏期休業中に「学生記者海外派遣事業」に参加した。これは、信濃毎日新聞を扱う販売店で構成される「長野県新聞販売従業員共済厚生会」の事業の一つで、県教委、共同通信社、外務省、米大使館との共催事業である。出発前から「アメリカの人種差別について学べれば」と話していた彼が、8日間のアメリカ取材で何を学び、何を考えたのか。公開授業では、彼自身に教壇に立っ



てもらい、パワーポイントを使いながら、アメリカ取材をした記者としての経験を語ってもらった。そして、「人種問題」「公民権運動」「異文化理解」などのキーワードを軸に、グローバル化が進む世界における日本の今後について彼の考察を語ってもらった。また、「アメリカを知ることによって日本を知る」という視点にも着目し、今まで気付かなかった日本人の優れた点についても学習した。

この授業の主眼は、生徒達に「新聞記者としての立場を経験した同級生」の姿を見せて、「主体的な学びと行動の楽しさ」や「様々な角度からものごとを見ることの大切さ」を意識させることにあった。さらに、諏訪地域や日本のことだけではなく、自分が世界全体に対して何かできるかを考えさせることであった。そのため、「新聞記事を読み、考える」ということよりも、「海外取材と記事執筆を経験した仲間の話を聞いて、帰国後の彼の変化を感じ取る」という授業形態に重きを置いた。

授業では、K君が自らの取材体験と執筆記事、そしてヒップホップアーティストの Kool G. Rap の歌詞を紹介し、アフリカ系アメリカ人達が抱える苦悩を語った。その後、授業担当教諭が米人種差別の歴史と現状を説明した。そして再び、K君が現地ガールスカウトとの交流で感じた文化の違いから、日本人の優れた特性や、相手の立場になって考えることの重要性を説いた。話は「憲法九条」や「アジア共同体の必要性」にまで及び、多角的視野を持つことの大切さを訴えた。また「中韓とは、政治の力だけではなく、文化や経済の力で相互理解を深めよう」と語り、「我々の世代がその原動力にならなければ」と力説した。

主体的な行動によって、多角的視野を身につけ、日本だけでなく世界の未来を考える同級生を見た生徒達は、大きな刺激を受け取った。この公開授業の印象は生徒達に強く残ったようで、その他の授業内容が生徒達の記憶にあまり残っていないのが、授業担当者としては寂しいところである。以下にその感想文を

記す。

- ・「同級生がここまで考えていることを知って、衝撃的。私も主体的に考えて行動してみたい。このような授業をしてくれた K 君に感謝。」
- ・「私はハーフで、幼いときから異文化理解が必要な環境で育って来たので、あらためて考えさせられた。もっと諸外国のことを知りたいと思った。」
- ・「実際にアメリカに行っているのも、すごく説得力があった。」
- ・「アメリカの差別には興味が持てなかったが、体験談を聞いて心を打たれた。」
- ・「幼い頃にアメリカに住んでいたが、当時、差別について意識していなかった。久しぶりに手紙でも書いてみようかなと思いました。」

【3】実践の総括と今後の課題

(1)実践の総括

NIE 実践の重要テーマに「新聞で学ぶ」「新聞を学ぶ」「新聞をつくる」という3視点があるが、この3視点にそれぞれ関連する授業が実践できたことは、一つの成果であろう。特に「新聞をつくる」というテーマに関係して、「記者という立場を経験した者が何を感じたか」という新たな観点で NIE 実践ができたことに一定の手応えを感じている。これは協力してくれた K 君、ご助言をいただいたアドバイザーの江澤先生を始めとする推進協議会の皆様のお陰である。

(2)今後の課題

本校における NIE の実践は、担当者の取り組みが中心で、学校全体へと拡大しなかったことは次年度への課題である。その要因の一つに、校内での情報発信不足がある。「NIE 研究指定校に認定され、一部の教員が新聞を授業で扱っている」という認識の教員が多く、NIE の教育効果や実践方法の理解度は高くない。しかし、本校は若手教員が多い影響なのか、新たな取り組みに対して積極的な面がある。そのため、NIE 担当責任者によって効果的な情報発信ができれば、NIE の広まりに大きな期待が持てる。担当者としての責務の重要性を痛感する。

本年度いくつかの研修会に参加し、小中学校の先生方の情報交換や情報発信の力を目の当たりにし、高校の教員として自省する機会が多々あった。小中と比較して、高校は自身の取り組みのノウハウを共有したり、その実践例を発信し協力発展させていく機会が少ないように思われる。高校でも様々な魅力ある取り組みが行われているにも関わらず、それが個人の段階で停まってしまっているのは誠に残念なことであると痛感した。かく言う私自身も、参加できた研修会に限られており、その一端を担ってしまっている現状を恥じるばかりである。その現状を打破すべく、次年度は校内通信発行や研修会などを企画して周知を図るとともに、研修会での情報交換と研鑽に努める一年にしたい。

また、研究指定校2年目となる4月からは、一年を通じての新聞購読を予定している。NIE 推進協議会からいただける新聞は4ヶ月分であるため、その他の月にも複数紙の購読をし、生徒や教員がより新聞を扱いやすくするねらいだ。本校では、小論文対策や、AO 入試合格の課題として新聞を扱う生徒が多く、新聞がいつでも閲覧できる環境を整えることは必須である。新聞の設置場所も一考の必要があり、もっと生徒の目に入る場所を検討したい。

担当者個人としては、数人のグループがテーマごとに新聞を作成してプレゼンテーションをし、時事的な事柄について分かりやすく解説するという授業形式を検討中である。